

(1) 教育実習から学んだこと 〈2〉

暗記科目としての社会科の克服を（高校 日本史）

法学部 4年 A.S

◇「暗記科目」としての社会科の克服

社会科の授業を行ううえで、必ずといってよいほど直面する課題が存在する。それは工夫を怠ることで、いわゆる「暗記科目」や「教科書丸写しの板書」という安易な授業に陥ってしまうことだ。そういった授業形態では、生徒の成績を伸ばすことはおろか、社会科の授業が持ち得る未来の意味すらも伝えることができない。今回、教育実習を経て、短い期間ながら社会科の教師の一員として日本史の授業を担当した経験を基に、その課題の究明と授業実践で試行錯誤した授業展開の方法について述べていく。

社会科というのは、本来私たちの生活に根差した実践的な科目である。日本史、世界史、地理、公民などそのどれをとっても人間生活の積み重ねや価値尺度、秩序形成の歴史を著した内容で馴じみやすくかつ実用的な学問だ。しかし、これをフィールドワークや体験学習ではなく、教科書を主軸に、しかも限られた期間の中で学ぶとなると話は異なる。膨大な内容を圧縮した教科書は、個々の情報を繋いでいた連関が希薄になり、数多くの重要単語や専門用語の羅列は生徒のやる気や関心を削ぎ、それを教師の手助けなく完全に理解することは難しい。教師の側も、その繋がりを再現あるいは再構築することに四苦八苦し、油断すると教科書をなぞった味気ない授業に落ち着いてしまう。これは、社会科の科目ほぼ全てに共通する課題で、私自身学生の頃に社会科を暗記科目として捉えていた経験があり、今回の教育実習で教師として暗記ではなく教

える意味のある授業をつくらうとしたことで、この問題に向かいあうことになった。

しかし、生徒と教師の双方が関係するこの課題は、明らかに教師の力量と努力によって左右される部分が多い。生徒が社会科を暗記に頼ることは、良い習慣とは言えなくとも勉強の手法の1つであることには間違いなく、また時間をかければ長期的な知識の定着は無理でも短期的には試験で一定の結果を出すことは可能だ。一方で、教師はその場しのぎの授業を毎回続けるわけにはいかず、その行為は生徒の意欲や成績にも大きく影響する。何より教科書通りの授業を実施して、生徒が意欲の無い暗記に走ることは教師として絶対に避けなければならない、復習のやり方や覚え方が生徒たちだけで見つけられないのならば、それを授業の中で解説し、生徒の学習を補うことこそが教師の役割である。この課題は現在においても依然として存在し、現役の先生方もその克服のために、授業形態や教材の工夫など様々な手法で生徒の関心を引きつけ、暗記に頼らない覚え方を実践させていた。

今一度確認すると、社会科の教育が抱える問題というのは、情報過多で繋がりの薄くなりがちな教科書通りの授業から脱却し、同時に暗記科目として意欲を失っている生徒の状況を改善し、社会科特有の生きた知識を身に付けさせることだ。今回、日本史の教員として実践した教育実習の体験をたどりながら、現場の先生方に教わったことを交えつつ、この課題への取り組みを述べていく。

◇歴史の繋がりをドラマ仕立てで説明

3 回目の教壇実習を終え、ようやく授業のやり方に慣れてきた頃、教科担当の先生から、授業の形はできているが教科書通りの板書で生徒を引きつけて考えさせる工夫が足りない、と指摘された。この時がまさに課題にぶつかった瞬間だった。指摘の通り、生徒に授業内容に興味を持ってもらうための取り組みが足らず、更にほぼ教科書通りの板書をしてしまったため、生徒の授業参加を上手く促すことができず、板書を写させるだけの暗記科目そのもののような授業になってしまった。

これを改善するため、まずは授業内容を生徒の感覚に近づける工夫をした。学生時代の私自身が、堅苦しい内容や難解な漢字の制度や人物名にあまり親近感を覚えなかった経験から、内容をなるべく現代の、今の学生に理解しやすい言葉や例に置き換えて表現するよう心掛けた。例を挙げると「律令国家の形成」を「天皇と法律を中心にした国づくり」に「太政官」を「内閣総理大臣のような政治のトップ」といった具合だ。もちろん、大半の生徒はわざわざ言い換えなくてもきちんと読めば理解できる内容のはずだが、堅苦しさと難しさを和らげた表現は生徒たちの頭にだいたい入りやすくなったようで、生徒たちの関心を集めることに成功した。

また、歴史上の人物に関しては教科書に載っていないエピソードを盛り込み、諸制度や政治改革についてはそれがどのような目的で施行されたのかを説明の頭に持つてくることで生徒を引きつけ、視覚的にも有効な図や絵を用いて説明を加えた。

そして最後に、それらの工夫を含め、歴史の授業を演説に近づけるよう喋り方に力を入れた。生徒が自分たちではなかなか自力で読み解くことが難しい、教科書の単語や人物同士の希薄になった繋がりを再現するために、芝居や劇にも似た語り口調で歴史を繋がるのあるドラマとして表現しようと心掛けた。歴

史を扱ったドラマやドキュメンタリーの方が授業よりも集中して見続けられた自身の経験を元に、話し方や内容に緩急をつけ、更に話の結末である「落ち」で伝えたかったことの全体が浮かび上がるようにすることで、生徒たちの理解や納得といった反応が少しずつ感じられるようになっていった。生徒たちを授業に引きつけるために、授業の内容をできるだけ生徒の身近なものに置き換えつつ、使う言葉や話し言葉で授業に引き込むことは概ね達成することができた。

◇質問を組み込み生徒の主体性を引き出す

生徒たちに関心を持ってもらうことが概ね成功したところで、授業として次の段階に挑戦をした。教師のサポートが大切なのは確かだが、先生ばかりが頑張っているのではなく、授業の主体である生徒がより自発的に思考するための取り組みが必要だと考えていた。同じ日本史という科目を教えている教科担当の先生の授業観察を行っている、授業中は先生の語りだけでなく、折々に生徒への発問を、しかも複数形式で投げかけていることに改めて気が付いた。質問に関して相談をしたところ、授業への生徒の参加の促進、重要語句の確認、過去の問題と絡めた習熟度のチェックなどその役割が多岐に渡ることを再確認した。更に、質問に答える思考力を養わせることで、生徒が授業内容を教師のサポートを受けつつ自力で解答や授業のテーマを導き出せることを発見し、早速その次の授業から質問を生かして生徒の自主性を高める手法に重きを置いた。

しかし、的確な質問を作成して発問するというのは想像以上に難しいもので、生徒の意欲の高さや習熟度を理解していないと、見当違いの解答が返ってくることや答えに迷って生徒が黙り込んでしまうなどの失敗が多々あった。教科担当の先生のように、授業に自然に質問を織り込むというのはとても複雑で、

技量の必要な作業であることを痛感した。

すぐに先生方と同じ手法にたどり着くことが不可能であると理解したうえで、それでも試行錯誤をした結果、授業の導入の段階での質問を増やすことを実施した。授業開始後 5 分ほどの導入の時間では、その日の授業のテーマや概要や大きな流れを説明し、それを生徒にすんなりと理解させることで授業に参加する意欲と最後のまとめとの合わせ技で習熟度を高めることが目的である。その生徒の参加を促しやすい時間を活用し、生徒への質問の量を増やすことで、生徒に考えさせる思考の育成の時間をより多く提供することに成功した。

ただ質問を投げかけるのではなく、生徒が正答して納得し、喜びを感じられるように生徒たちの答えを合わせて授業のテーマが完成するように工夫をした。導入の時間でしっかりと概要をつかんだ生徒たちは、より授業に参加しやすい状態になり、それを無駄にしないためにも、過去の重要事項と結びつけた質問などもおぼつかないながらも取り入れていった。それから、回を増すごとに授業の内容はよくなっていったように思えたが、それはあくまで実習生としての話であって、現役の先生方が今も取り組んでいる課題への解決はいまなお遠く険しい道のりに思えた。

2 週間という短い実習期間のなかで、課題の解決に向けて私自身が実践できたことは、授業内容を生徒に近い内容に変換すること、質問によって生徒自身が授業の内容やテーマを理解してくれるようにすること、の大きく分けて 2 つであった。課題の発見と、これら課題の解決へ向けての授業展開の方法というのは、教職の志願者や現役の教師の方々からすれば当たり前のことのように映るかもしれない。しかし、その当たり前をただ授業で聞くのではなく、実践してその大変さを知ったことで少しだけでも社会科の抱える課題につ

いて取り組み、その解決に向けて努力することができた実りある教育実習を送ることができた。